

緊急インタビュー 漁民 / 農民 / 市民の声

ここには、諫早干潟緊急救済東京事務所が、2001（平成13）年2月に行なった、利害関係者へのインタビューを掲載する。報告の担当者によって、報告書の形式などが異なるが、発言者のニュアンスなどを活かすため、あえて統一しなかった。また、匿名希望の発言者があり、さらに予期せぬ発言者の不利益を未然に防ぐため、すべての発言者を匿名とした。趣旨をご理解の上、ご容赦いただきたい。

なお、この場をお借りして、インタビューを快諾してくださった発言者の皆さんに、心より感謝を申し上げます。

- 荒尾漁業協同組合（熊本県荒尾市）組合員のご夫妻（夫 50 代前半・妻 40 代後半）：2 月 2 日（金）

〔生産の状況〕

ノリ養殖（10 月初旬 種付け、11 月中旬 生産、12 月中旬 網交換、→ 2 月中旬まで）

イダコ、イカ（4～6 月）

ノリ養殖の準備（7～8 月）

〔被害の状況〕

ノリ→3 年前（1998 年）から徐々に漁獲が減少していた。

- ・ 今年では昨年の 1 / 3。売り上げも 1000 万円から 300 万円に減少。
- ・ 12 月 20 日以降は生産なし。色落ちが激しく、もう網を引き上げた。
- ・ 1 月の入札は、二回ともゼロ。
- ・ まだプランクトンがいるため、冷凍物はそのままにしてある。
- ・ 昨年 1 月には色落ちしていた。

イダコ、イカ→3 年前から急激に減った。

- ・ 1997 年は豊かだったが、1998 年に激減した。
- ・ 2000 年はイダコも獲れなくなった。

〔考えられる原因〕

昨年 12 月 10 日の西風の後、異変が顕著になった。西風でプランクトンが移動したのではないかと。これは諫干の影響である。あそこは赤潮製造工場で、第 7 サティアンのような場所だ。海中のプランクトンの密度は、荒尾を 1 とすると、潮受け堤防前はその 19 倍程度に達していると思われる。また、潮受堤防締め切り後は、潮の流れが遅くなった。

〔一般の消費者の皆さんへ〕

有明海異変の問題は、けして他人事ではありません。私たちみんなの食糧問題です。もう、これ以上、輸入に頼ってはいけません。

〔対策・要望〕

- ・ 段階的に水門を開けよ。一時的に悪くなっても最終的には良くなる。
- ・ 融資ではダメだ、返す目途が立たないから。とにかく海を返せ！

〔その他〕

- ・ 今年 1 月 1 日 & 13 日のデモに参加した。
- ・ 市役所には、有明海の再生を呼びかける横断幕を掲げた。
- ・ 行政は「荒尾沖に国際空港を作ろう」などと寝ぼけたことをことを言っている。
- ・ ノリ養殖の酸処理剤は、廃船に溜めて組合が回収に回っている（問題となっている海洋投棄はしていない）

- 佐賀県太良町の三名：2 月 2 日（金）

A さん（大浦漁協役職）

B さん（造船所経営）

C さん（主婦 / 非漁家）

〔地域の概況〕

- ・ 小長井は元々林業の地で、漁業の歴史は浅い。しかし、竹崎は漁業の歴史が長く、「女潜り」という唯一伝統的な潜水の歴史もある。だが、若い人が地域から出て行ってしまうので、後継者難の問題は深刻。歴史ある漁法を伝承できないと言う無念さがある。
- ・ 出稼ぎに行くにも、地方では就職難であり、地域の者には海しか生きる道はない。
- ・ しかし「我々は今、丘に上がった河童である」。
- ・ 今の状態が続いたら家族を養うことができない。生活がかかっている。必死だ。
- ・ 一般の人々にも、有明海の問題を自分のこととして理解してほしい。世論を味方にしたいので、アピールなどの表現が大事だと思う。
- ・ 「有明海は金の卵を産むニワトリ」と、40 年前は言われていた。有明海のタイラギは甘味が違う。これは干潟が育んできたおかげだ。干潟は、いわば味の素である。
- ・ しかし、我々が問題としているのは、金ではない。有明海からの恩恵に報いなければならないという思いにかられている。
- ・ 「宝の海」を取り戻すことは、有明海への恩返しだ。

〔主な生産状況や被害状況〕

A さん：冬（12～3 月）のタイラギ漁で、かつて、300 万～800 万円あった収入がゼロになった。

B さん：年間約 8 隻の船を造っていたが、二年前から注文がなくなった。漁業被害は、漁民だけでなく仲買人・魚市場・鉄工所などなど、地域全体の問題である。

〔考えられる原因と対策・要望〕（雑談風なまとめ）

漁業被害をもたらしている要因は、諫早干拓 / ノリ業者による酸処理 / ノリ業者が使用する肥料（チッソ、リン）による汚染、この三つだと考えている。今は特に諫干の問題解決に団結して取り組む。

〔諫早湾干拓の問題〕

- ・ 海砂採取のために掘った穴が、貧酸素水塊の温床となっ

ている。穴を埋めよ！

・潮受け堤防の存在は、潮流を弱くし潮位を上げる原因となっている。全面撤去せよ！

・調整池から排出される「毒水」が、有明海全域を汚染している。汚水をポンプで汲み上げよ！（雨が降ると調整池の水位が上がるので、汚水を放流している。今は夜に、こっそり放流している。）

・穴、堤防、汚水、共に赤潮発生の要因となっている。

・ちなみに、大浦港では何も高潮対策をしていないぞ！そのため、潮受け堤防が出来てから、台風の時（高潮or満潮時）の危険増えた。何とかしろ！

〔有明海を「宝の海」に戻すためにやらなければならないこと〕

・有明海の漁業被害は、他にもいろいろな要因がからんでいるが、「宝の海」を取り戻すためには、まずは諫早干潟の回復が重要である。

・そのためには、調整池内に海水を入れ、水の出入り（循環）を回復させなければならない。水門開放が、単に排水のみに終わるのではなく、海水を入れることが大切だ。

・潮受け堤防を壊す。東部地区の人々は「早く壊せ！」と叫んでいる。壊す、もしくは可動堰化する。

・ポンプアップで調整池内の汚水を汲み取る。

・内部堤防も撤去する。

・堤防内外のヘド口を浚渫する。

・工事の環境アセスでは、データの改竄など情報操作が行われた。

・今年の、事業再評価は、情報公開を徹底させ公正にやれ。

・（事業再評価の）第三者委員会メンバーを公平に人選せよ。

・金子知事も漁師の倅なら、少しは俺たちの気持ちを理解しろ。

・農水省に直訴に行きたくても金がない。

・福岡では、3月もしくは4月の水門開放を目指している。もし政治決着がつかない場合は、大闘争になるだろう。4 / 14決戦だ！、という構えである。

〔養殖ノリの酸処理〕

・酸処理は、熊本から始まって、この3～4年の間に、福岡、佐賀へと広がった。

・酸処理剤を、海洋投棄をせずに回収すればよい。

・今ではノリ業者も反省しているようだ。

〔チッソ、リンなどの肥料〕

・良質のノリを作るための栄養として使用。

・ちゃんと溶かして使えばよい。

●福岡市博多の寿司店従業員

（板前さん / 40代前半）：2月2日（金）

〔思うこと〕

今の海苔被害には泣きが入る。海苔の値段がつり上がるのも痛い、高い金額を出してもうまい海苔が買えるわけではない。韓国産のものも出回っているが、九州・博多にくるお客さんは誰でも有明海苔が食べれるものと思ってやってくる。そのお客さんを裏切るわけにはいかないが、今

の海苔で太巻きを作っても風味もなく不味い。

また、タイラギが獲れなくなったのも痛い。外国産のものも出回っているが、やはりこれも有明産にこだわりたい。今、無理をして有明産のタイラギを購入しているが高い。が、急に値段を釣り上げてもお客さんにも悪いので、採算のたつメニューを考えるのに頭が痛い。

四方を海で囲まれた日本にいて、しかも博多にいて輸入物を使うことは、寿司屋のプライドが許さない。博多にいる以上、有明産のものにこだわりたい。またお客さんは、それを楽しみに来てくれる。客を裏切れない。うちのうちに頭を痛めている料亭や旅館は、佐賀や熊本、長崎などにもいっぱいいるはずだ。

大分県の阿蘇出身だが、九州の中で一番好きな県は佐賀県。その理由は干潟があるから。干潟で遊ぶのが小さい頃から好きだった。料亭では、ムツゴロウを出すこともあるし、自分でもあの苦みが好きで食べる。信じてもらえないかもしれないが、以前、むつかけてムツゴロウを捕まえた時に、ムツゴロウの大きな目から涙が出るのを見たこともある。

●長崎県小長井町民（70代女性）：2月3日（土）

〔報告〕

この方は、入り江でカキを捕っていた。漁業権を持っている漁民ではなく漁協には未加入、いわば普通の住民で、自分たちが食べる分だけ漁をするいわゆる自由漁業の方だと思われる。入り江には1999（平成11）年に完成したとても大きな防波堤ができていて、その防波堤と海をはさんで対岸にその女性の家がある。今年、その防波堤から対岸を結び、大きな陸地を作り多目的広場が作られるという。潮の満ちてこなくなった岸は元は干潟で、今は貝の死骸やゴミが散乱しているが、埋め立てられるのだと思うと掃除をする気にもなれないという。そんな彼女は、かつての干潟と防波堤の間の、わずかな幅しかない川のような海の中に、からうじて生息しているカキを捕っていた。「多目的広場ば、便利な言葉じゃけど、なんも意味わからん」小長井町はかつては漁業と石の町だったが、漁業が廃れて石屋だけでも肥やそうと、防波堤を作ったのだらうと女性は言う。

「あきらめている。」「今から何をしてもムダだ」と言いながらも最後に「もったいなが宝の海が・・・」と心の底からつぶやいた女性の複雑な気持ちがとてもつらかった。

〔状況〕

以前はカキの他にもタイラギ、アナジャコ、アサリ、タコ、またこの付近の川では水のきれいなところにしか生息しないウナギも捕れたとのこと。干拓工事が始まり、また防波堤ができてからはすっかり潮の流れがなくなり、近所から湧き出るきれいな出水のおかげでからうじてまだカキが少し捕れるが、他は全く捕れなくなった。

去年の夏の赤潮の時は海が真っ赤になり、天然のアサリが大量に死んでいた。息子や孫は、もうここでは釣りはできないと言い、長崎までわざわざ釣りに出かける。近所の漁師はみんな補償金をもらって漁師を辞め、諫早の干拓工事で働いたり、出稼ぎに行き生計をたてている人が多い。

「この干拓は間違いだった」と、ひとり叫んでみても憎まれるだけだ。

【考えられる要因】

ノリの養殖に使われる酸は海を殺した大きな一因だが、魚の産卵場所を埋め立てた干拓工事は致命的だったと思う。

【干拓工事までの状況】

小長井の人々は最初は猛反対だったが、何度も説得にくる行政や周囲に次第に押されていったのだ。防災・人命という言葉には反論できなかっただろうし、金にもふらついたはずだ。

【防災効果について】

全くない。大雨の時は水に浸かっている。

【今、言いたいこと】

行政は、この干拓工事に関しては一切否定しない。文句ばかり言っていると周りから変人扱いされる。行政は埋め立てる前に「埋め立て工事後に何か変化があったら知らせたい」と言った。工事開始後、井戸水が出なくなるなどあったので、県の土木事務所に行ったが、人事が代わっていて、取り合ってもらえなかった。

家の裏で木の皮を燃やしていると、ダイオキシンが発生すると役所の人間が注意に来るが、自分らは海を壊している。

漁業権のあった漁師は海を失っても、補償金をいっぱいもらったかもしれないが、晩のおかずや客にもたせる土産程度に、天然の魚介類を捕っていただけのただの住民は、魚も捕れなければ、お金もない、また情報も入ってこないし、声も届かない。

もう誰も信じられない。

昔の海に戻るには半世紀はかかるかもしれないが、この先ずっと（水門を）閉めてばかりはいられないだろう。

市民団体などには、もっと早く運動を起こして欲しかった。工事の始まる前から運動を起こしてくれたらよかった。

●島原漁協組合員 3 名：2 月 3 日（土）

A さん：50 代前半（以前は：クツゾコ・エビ・タコツボ漁 / 現在：クツゾコ漁）

B さん：30 代後半（以前：ワカメ・エビ / 現在：サンマ（新潟まで出稼ぎ））

C さん：40 代前半（クルマエビ・クツゾコ）

【概況】

・漁獲高は、5 年ぐらい前から比べると、去年は 50 分の 1 ほどだったと思う。

・エビはほぼ壊滅状態で、現在稚魚の放流を始めていて、一応の効果はみられるが、減っていくのには追いつかない。

・島原のワカメは一番獲れた時の 100 分の 1 だ。ワカメは 5 月に種付けをし、半年間小屋で育てて、10 月の水温の下がった頃に海に出す。その時水温が高ければワカメは汚れるし、赤潮があればワカメは全滅する。

・クツゾコ（舌平目）は以前は、一潮に最低でも 100 キロの水揚げがあったが、今は 60 キロがやっとだ。

・20 年ほど前から、海は浅いところからどんどん傷んできたように思える。クツゾコは、以前は柳川や佐賀の浅い海

にいたが、そこに住めなくなってきたクツゾコは、どんどん南に下がってきて、島原の深い海にいるようになった。

・1992 = 平成 4 年頃から漁獲高はガクッと落ちた。

・潮流、潮位、水温、などなど、有明海全体が変わってきている。

【有明海の変化について、考えられる要因】

・川からの流量が減った。球磨川のダムや筑後大堰などで、外洋まで水が来なくなった。

・海砂採取によるもの。ここ 20 年ぐらいの間に佐賀県の護岸工事が急速にすすみ、港湾が整えられた。と、同時に海が汚れ始めた。瀬戸内海から海砂採取を断られた事業者側は、有明海約 5 ～ 6 カ所から砂を採取していた。採取のために掘られた穴は、貧酸素水塊を作り海を殺した。また、海の底は貴重な魚の産卵場所だった。

・ノリ農家による酸の使用。今回の一連のノリの不作は諫早干拓の影響もあるが、ノリ農家の酸使用によるものだとも思う。酸使用したものの収穫しなかったノリはそのまま海に放置され、また海を汚す。翌年、もっと汚れた海には、昨年と同様の酸では効かなくなり、もっと強い酸を使用することになる・・・このような悪循環が海を汚している。また、フジツボがつかなくなる為の薬剤処理も原因だ。

・諫早干拓工事によるもの。さまざまな要因が海を汚しているが、諫干が致命的である。魚の産卵場所を埋め立て、調整池からは毒水を出している。またその他のさまざまな要因も、干潟の浄化能力などによって今まで助けられていたように思う。

【雲仙普賢岳による影響はあったか】

・全くない。自然の災害によるものは自然に戻る。噴火の半年後にはエビが捕れるようになっていた。自然災害は待っていれば必ず元に戻るが、諫干のような人間によるものは、絶対によくない。どんどん悪くなる。

・ところが行政は、昨今の不漁を普賢岳の噴火のせいにしてしまう。普賢岳の噴火は、諫干だけでなく、島原周辺の他の公共事業を容認する上での大きなきっかけのようなものになっている。

【着工まで】

・長崎の漁師は最初は反対だった。が、行政が工事をするため、漁協組合員の過半数の承認を得ようと、何度も説得に来た。沢山の補償金をもらって漁師を辞める者もいれば、無理矢理了承させられる者もいた。

・今回、3 県（福岡、佐賀、熊本）のノリ農家は、自分らの身にふりかかってきたことだから大騒ぎしているが、長崎の漁師達が着工前に反対運動をしているときには、全く力を貸してくれなかった。

【防災効果について】

・全くない。既存の堤防を修復及び嵩上げして、大きなポンプを使えば十分だ。

【後継者問題】

・所得は以前の 5 分の 1、今の漁業には全く魅力がない。それでは後継者は育たない。自分たちは父親を見て、漁業の楽しさやおもしろさを知り、漁師になったが、今の漁業にはそれを伝えられるだけの魅力がない。自分らも今のまま

では、あと5年漁師を続けるかどうかもわからない。

【要望】

宝の海を返してほしい。

それには、対策を徹底的にやる必要がある。

1. 水門を開けるだけでなく、撤去しなくてはだめだと思う。

また、海底の砂を採取したためにできた穴を埋めて、元に戻してほしい。

海が戻り、魚が戻り、産卵して育てその魚が捕れるまでには10年はかかるだろうが、海が戻るという希望があるならば、待てると思う。

水門の撤去後、海の表層は比較的早くに戻れると思うので、ノリは早くに回復するだろう。が、我々漁師は（魚の産卵する）底層が大事なので、その状態を以前と同様に戻すには、時間はかかると思う。それでも海を元に戻したい。「魚の住み良か所は、良か砂のところ」だと思う。

2. ノリ農家の酸使用をやめてほしい。

3. 筑後大堰も撤去して、川からの流量を増やす必要がある。

【今後の地元での動き】

・干拓工事反対派の漁師の署名を集めたいと思っている。推進派も大勢いるが、昔に比べれば今は反対運動をしても白い目で見られなくなった。また、民間による水質や地質調査のデータを集めたい。

【報告者の感想】

お話をうかがってから2週間ほど後に、この漁師さんたちとお話する機会を得ました。私たちが島原におじゃました際、カワハギ、オコゼ、キャアメ（サメの一種）のお刺身をごちそうして下さいましたが、その時よりさらに捕れなくなってしまった、と嘆かれていました。

また、プランクトンの異常発生なのか、海が濁っていると言っていました。

私たちがオコゼを見たとき、黒い色をしていました。オコゼは海底にいて、カメレオンのように、居る場所の色に変化する魚とのこと。「前のオコゼはこげん色ばしとらんかった」という言葉が印象的でした。

●長崎県有明町漁協の2名：2月3日（土）

【なぜ干拓事業に同意したか】

湾外漁業に影響がないという説明があったことと、防災と言われて水害のことを考えて同意した。

【どのような被害をうけているか】

カニやイダコ、コウイカ、アカグチなどを主に獲っていたが、1997（平成9）年を境に、漁獲高が激減した。

カニは11月から5、6月までがメスガニ、6月から10月がオスガニが獲れる。青年部による稚魚の放流により、1998（平成10）年春まではある程度の水揚げがあったものの、その年の夏から死んだカニがかかるようになった。キログラム単位の水揚げだったものが、去年（2000）は数匹の単位になってしまい、船の油代もでない。

カニの漁場は底生生物が豊富なところでもあり、カニは砂に潜って冬眠するが、底生生物の激減に伴ってカニは減

ってしまった。カニは水深の低い砂場で育って沖に移動するが、ヘドロの拡散により住める環境ではなくなってしまった。

回遊魚のアカグチは、1997（平成9）年を境にほとんどゼロに等しい漁獲である。イダコやコウイカは湾口部より東で獲れるが、今はほとんど獲れていない。今までは6月は禁漁し2月は漁業道具を揃える流れでやってきたが今は1年中仕事しても以前のようににはならない。これらの被害は予想外であった。

2年前から組合の壮年部で、独自でヘドロ調査を行ったが、ヘドロが蓄積しているところはタイラギのポイント（良くとれる場所）であり、長崎大学の東先生の底生生物の調査データとぴったりと合ったので非常に驚いている。

【有明海はどのように変わったか】

干拓事業が始まってから、とにかく潮流が遅くなった。着工前は、漁の際、潮流の流れが速く、網が絡まって漁が出来ないくらいであったが、今では流速がいちばん速い時でも、網が絡まって苦勞することはない。また、1997（平成9）年から粘った渦（ガタ土＝シルト）がつくようになった。

【生活環境はどのように変わったか】

漁で比較的蓄えた漁師は、どうにか2、3年はもつが、ほとんどの組合員は、年金の解約をする始末である。それによって、どうにか油代の支払いをしている。解約者が列をなす状況である。最近、保証人の依頼さえも警戒されるようになってしまった。組合でも2年に1度の慰安旅行を取りやめて、今後の諫早干拓問題に対処するために使おうと決めた。

【このまま水門が開かなかったら、未来永劫に有明海での漁業は壊滅してしまい、また開門されても、しばらくの間、漁場が荒れて被害が続くと言われているが、それについてどう考えるか】

自然の生命力は強い。確証はなくても10年で有明海は元に戻れると思っている。自分は漁師である自分の親の背中を見て育った。自分には希望があった。自分は漁師しか出来ないし、海にしがみついて生きていきたい。漁師は自分の天職である。漁に戻れるためであつたら、水門が開いて有明海が再生するまで何年でも待つつもりでいる。若者も、海が再生したら戻ってくると思っている。有明海の罪滅ぼしをしたい。農民や漁民は辛抱強いものである。

【農水省に訴えたいことは何か】

総合的に事業を見直し、干潟を再生してほしい。干拓地を縮小し、高潮対策は既存堤防のかさ上げで十分である。防災の効果はないと思っているし、メリットと言えば水の引く時間が短縮されたくらいのもの。本音は堤防撤去と言いたいところだが、全部撤去は水害を考えると酷だから、お互いに痛みを持って、お互いに良かったと納得できるような方法で有明海の再生を望んでいる。とにかく我々の生活を、元に戻して欲しい。

●タクシー運転手（諫早市長田在住）

50歳代・男：2月3日（土）

長田に住んでいるが、干拓では市民皆が助かっている。一昨年の大雨の時も、潮受け堤防がなかったら大変なことになっていたはず。すんでのとこで、あちこちから水が溢れそうだったのだから。

●長崎県諫早市民（市街地在住・主婦）

70歳前後：2月4日（日）

知り合いには、干拓に賛成の方も、反対の方もおられますから、干拓に対する私の立場はとても微妙です。

まず、知っていることから申し上げると、補償金をもらって転業した方々の商売が、うまく行っていません。やはり長年、漁で暮らされてきた方々ですから、丘に上がって別の商売をするというのは、なかなか難しいようです。

干拓にはメリットもあって、小野島や森山では、大雨がふった時など、水門の操作が楽になっているようです。水害防止には、ある程度メリットがあるのでしょうか。

この辺（市街）も、水害の面では良くなっています。橋が高くなって、川幅が広がりました。

干拓工事には、反対の方も、賛成の方もおられて、さまざまです。かれこれ10年前、工事の計画が発表になった直後は、みなさん反対されていて、集まりでは「反対だ反対だ」と、大騒ぎになったのをおぼえています。

ところが、補償でうるおった人たちがいたんでしょね、その人たちが一年もすると、手のひらをかえしたようにおとなしくなってしまった。人間と言うのは哀しいもので、業（ごう）があり、お金の力はおそろしいと、今でも思います。

干拓工事で、田んぼの堪水（被害）は減りましたが、まち中の水害は、干拓工事と関係がないと思います。たしかに、まち中の水害は減っていますが、それは川幅が広がったのと、（本明川の）浚渫で橋の高さが上がったせいで、干拓工事とは関係ないと思います。

それでも、まち中の水害はあって、去年（2000年）でいうと、水月楼いったい、八天町は水につかっています。

〔諫早の町は、水不足になることはあるんでしょうか？〕

それがないんです。とても水に恵まれた町です。水道水源は、上の方では導水事業で引いた水ですが、こちら辺、旧市街地、下の方は、地下水です。それも恵まれていて、諫早の水道は、給水制限になったことはありません。とくに旧市街がそうです。

福岡や長崎が水不足でも、諫早はじゃんじゃん水が使えるて、よそから来た人に「この水不足の時に不謹慎だ」とさえ、言われたことがあります。農業用水が不足していると言う話も、きいたことはありません。

〔今、有明のノリに深刻な被害が出ていて、干拓事業を見直す動きもありますか？〕

干拓の目的が防災に変わったことには、正直言って疑問を感じます。調整池の水質は悪く、水は、何かには使えないようです。それに、有明海ぜんたいを汚してしまった。

干拓工事には、田んぼの水害が減って、「いいこともあるんだ」というような思いでいます。何せ、野鳥の貴重な飛来地を失ってしまったのですから、よその友だちには

「諫早では、なんてバカなことをしているんだ」と言われます。

今、こういうことになって、市長さんの立場は微妙ですね。諫早市は、近隣の町村と広域合併の話があって、昨日はその会合があったのですが、その席でも困っておられたそうです。

干拓に賛成の人たちの話や、田んぼの堪水のこと、樋門の管理やミオ筋のことなんかは、地元（地先干拓地）の方が詳しいですね。もちろん、干拓には反対の方もおられて、亡くなった山下さんには、崇拜者がたくさんおられます。ある時計屋さんがその代表格で、いわば静かに反対の運動を続けておられます。

干拓事業で補償金をもらって、一時、うるおった人、しかし、丘に上がって商売がうまくいかなかった人たちは、たしかにいます。ですが、世代交代と言うか、補償金をもらった代の人たちは、最近、徐々に亡くなっていて、息子さんたちの代になっています。補償金をもらった、かつての漁師さんたちだけでなく、諫早の干拓に断固賛成と言う人たちは、徐々に亡くなっていて、息子さんたちの代になっています。

漁師さんたちだけでなく、息子さんたちの代になると、決して「干拓断固推進」というわけではなくて、けっこう柔軟なわけで、親と意見が同じとは限らない。「親は補償金もらったけど、俺は関係ない」などと考える人も多くて、そういう方が増えていますから、世代が変わっていく今は、干拓反対／干拓賛成、という長年の対立がとける気運にあるのかもしれない。

世の中が変わっていくことは、いいことばかりではありませんが、いいこともあるのかもしれない。

●諫早市民（小野島（既成地先干拓地）在住／主婦／70歳前後／非農家）：2月4日（日）

〔工事の功罪〕

新しい排水路ができて、排水はよくなった。より下のほうの方は、水害の心配がなくなって良いのではないかな。潮受堤防ができる前は、梅雨時などは、毎年といっているほど、下のほうは水害にあっていた。

上流の宅地化も影響していると思われ、ちょっと大雨が降ると、見る見る内に排水路の水位が上がって、下のほうは水につかってしまう。

〔良くなったのは、新しい排水路のお陰ではないのでしょうか？〕

そこら辺が、正直、よくわからないんです。新しい排水路と、潮受堤防は、ほぼ同時期にできましたから。

〔今、干拓事業の中止などを訴える声も上がっています。事業を中止しても、排水路がもっと整備され、ポンプも増設されれば、水害はなくなるのではないのでしょうか？〕

そうかもしれませんが、わからんです。有明海の漁業被害が大きくなっていることは、諫早の者にとっては本意で、困ったことだなあと感じます。

〔既成地先干拓地の農業について〕

今は、どのお宅もきびしいです。コメの値段が安くて、

2町や3町規模では、農業だけでは、やっていけません。減反もありますし、その広さの方々は、ほとんどみなさん、兼業化されています。

かといって3町4町の広さがある方は、機械化などの借金があるわけです。大規模の方は、別の厳しい状況に置かれています。

〔水害について〕

潮受堤防ができるまでは、毎年のように水につかっていたわけですが、だいたい、島原鉄道の線路が、つかのつかないの境です。もっともここは、ちょっと高くて、屋根までつかのことは滅多にありませんでした。

潮受堤防ができただけでなく、ポンプ場も増設され、水路も拡張されています。水害だけでなく、ガタ土の塩害も、田んぼにはありました。

〔湾内漁業／防災効果〕

干拓工事にあって、ノリの養殖漁家さんたちは、漁業権を放棄しました。アゲマキやムツゴロウは、この辺では個人的に、ちょこちょことっていたくらいです（漁業権放棄の補償対象にはならなかったらしい）。

昔は、どの家も半農半漁の暮らしでした。田んぼが少ない家は、それだけでは食べられなくて、漁業も兼業していたわけですね。アサリもやっていました。

そういう漁ができなくなったことは悲しいのですが、かつては台風が来ると寝られなかったのに、干拓工事が始まってからは寝られるようになりました。何せ、夜の増水が怖いんです。音がなく、すーっとくるんです。

諫早の大水害の時は、もう、ここに住んでいましたが、ここらへんが一面、もう、すべて水につかってしまった。避難場所にまで行けないものですから、みんなしばらくお寺の本堂に寝泊まりしました。もっともこの辺では、大水害の時は死者が出ていないんです。

この辺で死者が出たのは、小野島新地の堤防が切れた時です。今は新地公民館になっている建物が、昔は分教場で、水害の時、子どもを迎えに行ったんです。ところが、お母さんたちが、幼子をおぶったまま、水に流されてしまって、それはそれは哀しい思いをしました。

〔報告者注〕

「上流の宅地化が、既成地先干拓地の水害に影響している」とする指摘は、干拓推進派によって不必要に誇大宣伝されているが、じっさいに諫早市をめぐるみると、宅地化の影響は皆無では無いように思われる。今後の、中立で冷静な調査を待ちたい。

●諫早市長田在住・第二種兼業農家（主たる所得を、農業以外の収入による）

50代男性／主な作物：たまねぎ／2月4日（日）

〔「諫干」について思うこと〕

干拓については最初は反対だった。理由は海を埋め立てることによる気温の上昇が不安だったから。海を閉めきめることは絶対に気象に変化をもたらすと思っていた。気温の上昇は、農家にとっては種まきの時期をずらすなどで、大変な影響がある。けれど、防災（効果）の話を聞いたとき、

水害で亡くなった人のことを思い、気の毒だと思い、干拓に賛成した。

今ではもっと早くに工事をやってしまえばよかったと思っている。前々から工事計画があったのに、何故こんなに待たせたんだと思う。早くに始めなかったから、今になって大騒ぎになっている。

〔気温は上昇したか〕

しなかった。

〔まわりの漁師は？〕

漁業権を放棄し、沢山の補償金をもらって御殿のような家に住んでいる。今は違う仕事についていて、それはそれでいいと思う。

〔今回のノリ被害について〕

あれはたまたま起こったこと。農家にある不作みたいなもの。ただの不漁にすぎない。今回、たまたま被害が起きたからって全て干拓のせいにするのはおかしい。来年も同じ様な被害が起きてから調査をすればいい。

〔造成した農地に入りたいか〕

入りたくない。入るわけがない。まず、第一に後継者がいない。今だって、自分ひとりで耕していても大変で畑が荒れ始めているのに、それ以上、畑はいらない。

それに、他に遊んでいる農地もいっぱいある。周りにも購入したい人はいない。

もしも、農業の会社でも何人かで共同で作ることができたら、ビニールハウスでアスパラやトマトなども作って大規模に農業ができたらいいと思うこともあるが実際は、できないだろう。何せ、干拓でできる農地の値段が高い。それと、あの土地は農地に向かないと思う。

〔干拓工事は中止すべきか？〕

今まで沢山の税金を使って工事をしてきたのだから、もったいないから完成させるべきだ。今中止にしたら、今まで工事に使ったお金はどうなる？ 払った漁業補償金はどうする？ 返すとも言うのか？

●諫早市小野島新地在住・第二種兼業農家

50歳代男性／主な作物：米麦／2月4日（日）

〔いわゆる「水門開放」について〕

絶対反対です。水門を開けると、まず、調整池内にたまったガタ（ガタ土＝シルト ヘドロ）が外に出ます。それから生じる問題をどうするんですか？ それから、工事によってだいぶ軽減された塩害の問題が、もとの木阿弥になってしまう。さらに、工事前は十年に一度くらい、クリーク（いわゆるミオ筋）の浚渫をやっていましたが、今はその人出がありません。そうですね、1960年前後ぐらいまで、いわゆるミオ筋浚渫を、地域住民総出でやったそうです。

だから、潮受堤防内の水位を-1mにすることは、やはり有効なんです。

佐賀県でも福岡県でも熊本県でも、沿岸の干拓はやっているではないですか？ 諫早の干拓だけ、どうして非難されなくてはならないのでしょうか？ 気持ちを正直に言うと、憤慨に近いものがあります。ノリの不作だって、恒久的なものでしょうか？

そりゃ、有明海全域に漁業被害が出ていることは、私どもの本意ではありません。有明海全体がダメになってしまうのは、私だって嫌です。生き物も大事だとは思う。漁民と私たちが、共存共栄できればいいんです。しかし、地域住民としては、ここで安心して暮らしたい。そういう私たちの声が伝わらず、干拓反対の声ばかり大きく取り上げられることには疑問を感じます。民主党も共産党もマスコミも、私たち地域の声に耳を傾けてくれようとはしません。ここ（既存堤防のすぐ近く）に住んでいる者にとっては、洪水が怖いんです。あなたたちも、ここにくればわかるでしょう？ 島原鉄道の線路ですら、あんな高いところにあるし、堤防はもう、ガタガタです。かつて堤防が決壊した時は、死者も出ています。

人命もさることながら、水害でコメやムギが、収穫ゼロ、台なしになる年があるんですから、それはつらいものです。

〔干拓工事の防災効果〕

この辺では、1982（昭和62）年の水害がひどかったです。-1m管理が無ければ、一昨年（1999）や去年（2000）の台風の時は、もっとひどいことになっていたのではないのでしょうか。

じつは、国営諫早湾干拓工事の計画が発表になった時は、「-1m管理なんかできるのかい」と思ったし、疑問を口にもした。でも、やってできないことはないんですね。ちょっとびっくりもしています。

〔その他に災害対策の方法は？〕

そうですね、そう言われると、無くはないんです。松崎や水崎のポンプ場は、潮受堤防締め切り前からありましたしね。天狗鼻に排水する新排水路の工事は、今、すすんでいますしね。

いや、本当、漁業被害がなくなるような防災対策があれば、それをやってもらえればいいんです。まったく、おっしゃる通りです。

どうしても潮受堤防を開けるのであれば、既存堤防の外のカタ土は浚渫してからにしてみたい。それと、潮受堤防を開けても効果のある水害対策をやってもらわないと。と言うと条件闘争になってしまうから、当面は「水門開放絶対反対！」です。

〔既存堤防の心配〕

しかし、潮受堤防締め切り前は、雨の夜はおちおち寝られなかったんです。ここからも見えるけど、既存の堤防は地盤沈下で、かなりガタガタでしょ。決壊しないかと心配で、寝られませんでした。

〔地先干拓地の農業〕

私は実は、山の方の出で、ここには婿できたんです。だからもともと、私自身は兼業農業者なんです。一般論で言っても、米価が下がってきていますから、うちあたりの70aぐらいの規模では、農業だけではとても食べていけません。兼業するか、よその耕地の耕作を請け負うしかないんです。専業農家は、よその遊んでいる耕地の耕作を請け負って、なんとかやっています。ただしこの辺、専業の方は本当に少ないですね。おかげでコメの減反の達成率がいいです。皮肉なものです。

田植えの時は、地域一斉に、田に水をポンプアップしなければなりません。以前はエンジンのポンプだったので、みんなで勤めを休んで田に水をひきましたが、今は電動ポンプですから、母ちゃん一人で操作できる。スイッチをポンと入れればいい。勤めを休まなくていいようになって、ラクになりました。

地下水使用は、この辺では、もう、やっていません。地盤沈下がおきますからね。この家は、地下水汲み上げをやめてから建てましたが、それでも不等沈下で、ご覧のようにガタガタなんですから。

うちもそうですが、この辺は麦米二毛作が基本で、したがって5月末にイネのタネをまき、6月20日以後に田植えと言うのが暦です。山の方だともう少し早いし、コシヒカリだともう少し早い暦です。うちも含めて、この辺は兼業農家がほとんどで、農作業に入出をかけられないものですから、ほとんどの家で、野菜は自家用にしか作っていません。専業の方は、ごくわずかです。

ガタ土はやっぱり、水害だけでなく干ばつもあるんですよ。ちょっと雨が降らないと、すぐに土がコロコロに固まってしまう。でも、水害と干ばつに気をつければ、麦はとてもよくできます。それと風の害も怖い。ムギでもイネでも、強風による倒伏が怖いです。

畑作物は、自家用栽培でいうと、タマネギはまずまず、ダイコンもまずまずですね。ところがサツマイモは味がしません。水が多すぎて、大きくなるのが早すぎるのでしょう。だから、大きな声では言えませんが、新干拓地でジャガイモをつくるというのは、ちょっとどうなのかな、と思います。まあ、新旧とわず、干拓地の農業は、米麦二毛作以外はむずかしいでしょうな。商売にならんと思いますよ。

〔悲しいこともある〕

そりゃ、いいことばかりではありません。有明海の魚は本当においしいです。世界一だと思っています。その魚が、干拓工事のせいでとれなくなっているのだとしてら、私らにとっても、こんな悲しいことはないです。うちだって「おかず漁」をしていました。みそ汁でも、しおだきでも、あげまきの美味しさは今でも忘れることができません。あまり言われませんが、この辺ではフナもウナギも美味しかったんです。

渡り鳥も減りました。前は、潟が一面、真っ白になるくらいだったんです。今でも、（既存）堤防のこっち（内側）には来ますが、数は激減です。鳥と魚の事を考えると、たしかに悲しいですね。

あなたたちの言うような、自然と調和できる防災法があれば、本当に良いんですが。

●諫早市川内町在住／専業農家（ミニトマトなど野菜／コメ／ムギ）60歳前後・男：2月4日

新干拓地に入植したいと言うやつは、おるんじゃないかな？ この不況でしょ。若い奴には地元で働き口がない。この辺にいつづけようと思ったら、農業はいいかもしれない。若いやつは、そう考えるのもおるだろう。

問題は、そういう若いのが、新干拓地に入るかどうかで、

10a74万円じゃあ、いくら平らで広くても……リースでもタダでわけじゃないし、大体、土地代以外に、家を建てる金、トラクターなんかの機械代がいるからね。それと、川内町新地、小野島新地、赤崎新地の例で言うと、入植してから10年は、食うや食わずだね。入植したいと言う若いやつがおっても、周りの歳とった連中は、そういう話、するからね、若いやつはビビると思う。

だいたい、赤土を客土しなければならぬし、しばらくは地盤沈下がつづくから、ハウスはすぐに建てられない。いいこと無いのよ。

【増反入植者は？】

こちら辺ではない。だいたい、ちょっと面積ふやしたって、コメムギは作れないし、野菜だから手間が増えるでしょ？ 農業は、規模を大きくすればいいってもんじゃない。

それにね、作付け面積を増やそうとすれば、何も新干拓地でなくていいんだよ。この辺だって、平らで広い土地があまってる。平らで広いのは同じで、新干拓地とちがって土は熟している。しかも安い。小作の相場は、1年で、ビニールハウスで一反5万円、田んぼで1反2万円だから、新干拓地とこちら辺の借り農地では、ぜんぜん勝負にならない。

【新干拓地で農業がうまくいくと、作物の価格が暴落しませんか？】

そりゃ、心配だよ。

JAはさ、まあ出荷業者なわけで、量が売ればいいというところもあるのさ。だから、新干拓地であれこれたくさん取れて、作物の値段が下がって、百姓の収入が減っても、JAは困らない。

【営農計画や、干拓工事全般】

営農計画は机上の空論で、農業の現場を知っている人間がつくったものじゃない。かといって干拓反対かと言えば、そうではなくて、やはり防災のための干拓なのさ。ここは20～30年に一度くらいしか水につからないけど、下の方は毎年のように水につかるからね。工事が始まって、それがなくなったのは、いいことだと思う。今、途中で工事を止めると言うのは、もったいないと思う。

●ジャガイモ（パレイショ）農家の夫妻（40才代）：長崎県愛野町／2月5日（月）

【報告】

愛野町の通称「じゃがいも団地」に車を走らせた。一面に広がる畑は全部がジャガイモ栽培だ。方々の畑に農民が出て農作業をしている姿があった。きれいに整えられた畝にポリマルチを張り渡していく作業に勤しむご夫妻に声をかけてみた。「精が出ますね」。肌寒い中、額にはうっすら汗が光っている。マルチを皺一つつけずにピンと延ばしていく手つきは鮮やかなものである。二人は作業を続けながら、そして時折手を休めながら、快く取材に応じてくれた。夫妻が交互に話してくれた。

【概況】

ジャガイモと水田を少しやっている。合わせても1町歩

とちょっと位しかないけど、働き手二人だけでやるにはこの位で丁度いい。この団地には親父の代からだから、入植して30年位になるかな。高校生の息子がいるが、いまだき跡を継いでくれるかどうか。なにしろこんな仕事じゃあ嫁の来手もなからう。

新しい干拓地に入植者がいるかって？ おらん、おらん、一人もおらんじゃろう、少なくともこの辺では。この辺りには数百軒の農家があるけど、行きたい言うやつはおらん。わしらもどんなに勤められても絶対に行かん。あんな所でやっていけるもんかい。土地代だけじゃあない、高い機械も買わんといかんじゃろうに、それに何たって客土もせんと何も育たん。土一つ買うだって馬鹿にならん金がかかるもんじゃ。誰が借金してまで行くもんかいな。絶対に穫れるという保証はないのじゃから、おらん、おらん、そんな奴は一人もおらんさ。まあ、行くとしたら大博打だな。わしらはここで慎ましくやっていくわいな。それでなくたって、あんなところから大量の野菜が出てきたら、わしらのジャガイモだって売れんようになるかもしれん。確かに影響は出るだろうなあ。

この畑だって数年に1度、ちゃんと客土しておるから、まあまあのジャガイモが穫れるわけだ。連作障害？ そうだなあ、今は農薬と客土でなんとか防げとるな。しかし、かれこれ20年も前になるかしらんが、あん時は連作より長雨でやられたことがある。まあ農家はお天道様次第だから。

●佐賀県早津江漁協組合員

【今回のノリ不作の原因をどう考えるか？】

10日～2週間で死ぬリゾソレニアが、12月初旬から今までずっと居座っている。どこから供給されているはずだ。

12月31日までは、何となく諫早が原因ではないかと思っていたが、1月1日のデモで諫早湾に入り、リゾソレニアの多さに驚き諫早湾は死んでいると思った。

【いつからどのような被害があったのか】

私は20年ほど前からノリの養殖をしているが、筑後大堰の閉め切りもその頃だった。

あげまきを中心として閉め切り直後、激減した。

年上の方の話ではセメントの泡が原因ではないかと言っている。

筑後川（九州一大きく、栄養も豊富）は有明海にとって大動脈だった。

それ以前はノリの色落ちの被害はほとんどなかった（渇水・大雨のときはあった）。

筑後大堰によって毎秒40万トンと水流も減った。

下流の佐賀は平気だったが、鹿島・大浦・たらはこの頃から毎年色落ちが始まった（1月頃）。（それまでは通常、2月半ばから下旬に色落ちが始まり、3月初旬になると色落ちと水温低下によってノリの養殖を止めていた。）

年上の方の話によると、東部地区は直接的には影響は出ていなかった。しかし、年々、海が変わってきている事に気付くようになった（病気が出たり）。

【平成元年 諫早干拓工事が始まる】

大浦・たらではノリがほとんど取れなくなった。1月9日

が原因ではないかと大浦の漁民が言っていたそうだ。

【平成9年4月14日潮受け堤防締め切り】

諫早と離れているのに、大潮の高潮は普通で40cm、高いときには60cmと閉め切り直後から高くなった。この事を農水省に問い合わせたが、地球温暖化のせいとか言われ、話しにならなかった。

・変化その1：早津江漁業

昔は水位が低く、ボートまで草履で行けたが、8月15日前後の盆潮（潮位が一番高い）の時は膝まで来る。トラックの前輪まで来て、長靴もダメだ。

・変化その2：ノリの養殖

平成9年：9月からノリの養殖が始まったが、

1・潮向が全く変わったとみんなが言っている。

2・流速も確実に変わった。

しかし、平成9年までは、ノリの収穫は通常だった。

平成10年：12月プランクトン大発生

（ユーカンピア（植物性プランクトン））

しかし、この年は気象条件が良く、雨が多かったために栄養塩が川から入り、プランクトンを押さえた。

1月下旬に生産をストップしたが、収穫はまあまあだった。ユーカンピアは今までも出ていた。

平成11年：1月初旬にユーカンピアを発見。1月下旬生産をストップ。

平成12年：ユーカンピアは出なかった。

12月初旬 リゾソレニアを発見。

12月中旬 沖合漁業はダメになった。

リゾソレニアは10日～2週間でいずれ死ぬものだが、今も居座る。どこから供給されるものではないか？と考えた。八代海と有明海は水の交換があまりない事から、今年に限ってリゾソレニアが発生しやすい環境だったのかと考えた。

12月31日までは諫早が原因ではないかと思った。

1月1日 福岡の呼びかけで諫早湾に入り、リゾソレニアの多さに驚いた。諫早湾は死んでいると思った。

●小長井漁協共同組合 元タイラギ漁師

【小長井漁協の現状と現在にいたるまでの大まかな流れについて】

われわれ小長井漁協は湾内4漁協（小長井、神代、黒土、瑞穂）のうちのひとつであるが他の3漁協は半農半漁で農業者が多く漁業に対する思いが違う。うちの小長井のみが漁業をしており一枚岩にならない。また潜水器組合は任意の団体である。ひとりひとりの生活を持っていて生活権を保つために（守るために）行政と交渉をして生活権を守っている。（漁業者の救済・振興策・タイラギ休業の原因究明）毎月話し合いが持たれているがいつも喧嘩状態である。

小長井漁業は海に出ていない。毎年堤防付近はアサリがだめで中ほどに行くほどまだ良い。あの堤防が原因であることははっきりしている。予想とは全く違って、アセスでは多少の影響であったし、「漁業経営は継続できる」とと前知事である高田知事も言ったが締結に一度も来ることはなかった。関連書類については役人でもないから組合員だ

け見せてもらえない。手元にはないが補償金交渉では「再補償は一切なし」と載っている。しかし明らかに工事の方法は締結とは違っていた。資材の搬入が陸上輸送という約束から海上輸送になり、試験艇の段階で大量のタイラギが死に、大打撃を被る。漁場調査委員会に平成5年にこれら航路問題について（融資の問題 特対事業 雇用問題 原因究明）それらの原因究明を求めてもそれらの死因を認めなかった。のちに出てきたが委員の人は漁に出ていないのでわかるはずがない。（手のひらに10個タイラギが死んで死んでいる貝が3つであれば諫早湾にはタイラギが70%生きているという論法で公表された）原因究明をして欲しいというがいつもその場しのぎであり、新たな問題が出てきても未解決のまま進まない。採砂地についても採砂してくれるなどと言った。その分の埋め戻しを求めても埋め戻しの砂が違って使えない。とにかくアセスがずさんであった。アセスで影響は軽微であると言われた。信じられないが相手は「偉い先生方の言うこと。信じるしかない」と言う。防災・人命の言葉で迫ってきたが防災について効果は半信半疑でいた。当時からアセス、防災には疑問をもっていたが国から言われ、補償金を分けるために仕方がなかった。

【水門を開放し事業の見直しの動きとなってるがそれについてどう考えるか。】

個人的に山下さん方法に賛成で、水門の拡幅・開放がいちばん良い。撤去についてはこれまでの工事費が無駄になってしまうので、いざと言うときには閉め、常時排水が良いと思っている。（本当に海を回復するには撤去しかないが）自分たちが開けても良いと言ったら自分たちの生活の糧がなくなり、ごくわずかであるが漁がある中でダメになる。（アサリの特対事業はほとんど効果はないもののそれでも細々と現にそれで生活している者がいる。それでどうにか生活している者のことを考えると本当か効果はないのだが言えない）湾内の人たちは行政の圧力があり、利用されている。干拓雇用は人質にとられているようなものである。同意をしてしまったので「中止・休止」とか言えないのである。

開門し漁場が回復するまでの生活の補償があるのなら、海に戻って漁をして生きたい。

有明全体を考えている人が少ない。その中で自分たちの生活を守るしかない。のり業者がやっと動いたが自分たちの立場がある。かれらの動きは今は死にもの狂いだ。融資が始まると士気が乱れると思っている。融資を借りたらおしまいだ。国は調査で引き伸ばしていきだろう。

第三者委員会についてははっきりとこの影響だという調査結果が出ないと思っている。タイラギの生態もわかっていないのだからアセスにならない。もとのデータが大切で4月からの情報公開制度で学者の責任を追及すべきである。

【緊急インタビュー取材スタッフ】

青木智弘／桐ヶ谷眞知子／陣内隆之／菅波 完
高橋義子／羽生洋三／二村絵理子／吉川多佳子